

＜今日の説教のポイント ルカによる福音書6章12～16節＞
一晩祈って12使徒を選ばれたイエス様。そこから知らされる恵み。

1 大事なことを決める時に神様に向かって祈れる恵み。

「イエスは祈るために山に行き、神に祈って夜を明かされた。朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた」(12-13)。父なる神様に真剣に祈り続けた末に大事な決定がなされたことを知らされます。このことから、「祈れるということは大きな恵みなのだ」と思われます。「これでいいのだ」と確信を持って次にコマを進められるようになれるからです。この時やゲッセマネの園で祈られたイエス様のように神様に真剣に祈ったならば、私達も確信を持って進めるようになれるのです。あとは私達たちがそのように祈るだけです。

2 イスラエルを継ぎ、派遣されることを意味する「12使徒」。

「12」、それはイスラエル12部族をまず思い浮かべる数です。「使徒」、それは「派遣する(アポストレオー)」から来た言葉(アポストロス)で「派遣された者」を意味しています。また、イエス様が天に昇られる直前に使徒たちに命じられたのは、「出て行って全ての民に洗礼を施すことと、イエス様から教えられたことを教えること」(マタイ28:19-20)でした。さらに、イスカリオテのユダの代わりを選ぶ時には残された弟子たちは皆で熱心に祈り(使徒言行録1:14)、アンティオキアの教会の群れがパウロを伝道に派遣する時にもよく祈って決めて派遣しています(同13:3)。よって、「12使徒を決める」ということは、ただ忙しくなったので選んだというようなことではなく、神の救いの計画、すなわち、「イスラエル → イエス・キリスト → 使徒 → 信仰者(教会)」と、「神様が選ばれた者」を用いて福音が全ての人に届けられるという、神様の壮大な救いの計画に連なっていることなのです。

3 多様な者たちを用いられる神様の業。12使徒から教会形成まで！

イエス様が選んだ人々は実に多様です。しかし、その人々がイエス様について行く中で変えられ、ついに命を懸けて主の福音を伝える者となったのです。コリントI12章で学んだ「主の体なる教会の部分」をなす教会員の多様性を思い出します。その皆に共通して求められていることが、神様に真剣に祈り、イエス様の教えを学び続けることなのです。